

博多とアジアの映画 137

松浦 仁

1974(昭和49)年、日本(東京)で公開されたアジアの映画は以下の28作品だった。

「片腕ドラゴン」(1972、香港)「大樹のうた」(1959、インド)「怒れ！タイガー」(1973、香港)「帰って来たドラゴン」(1974、香港)「嵐をよぶドラゴン」(1973、香港)「ドラゴン危機一発」(1971、香港)「危うし！タイガー」(1973、香港)「吼えろ！ドラゴン起て！ジャガー」(1970、香港)「子連れドラゴン女人拳」(1971、台湾)「武道大連合・復讐のドラゴン」(1972、台湾・香港)「地獄から来た女ドラゴン」(1972、香港)「戦国水滸伝・嵐を呼ぶ必殺剣」(1971、台湾)「必殺ドラゴン・鉄の爪」(1973、香港)「女ドラゴン！血闘の館」(1973、香港)「激突！ドラゴン・稲妻の対決」(1973、香港)「アンジェラ・マオの女活殺拳」(1971、香港)「怒れるドラゴン不死身の四天王、香港」(1971)「ドラゴン怒りの鉄拳」(1972、香港)「キング・ボクサー／大逆転」(1973、香港)「カラテ愚連隊」(1973、香港)「電光飛龍拳」(1973、香港)「残酷ドラゴン 血斗竜門の宿」(1967、台湾・香港)「無敵のゴッドファーザー 世界を征く」(1974、香港)「用心棒ドラゴン」(1973、香

港)「暗黒街のドラゴン・電撃ストーリー」(1974、香港)「ドラゴン vs. 7人の吸血鬼」(1974、香港・イギリス)「空手ヘラクレス」(1973、香港)

前年の1973(昭和48)年は、「東京ソウル・バンコック 実録麻薬地帯」と「燃えよドラゴン」の2本。翌年の1975(昭和50)年は、「ブルース・リーのグリーン・ホーネット」と「ドラゴンへの道」の2本で、1974(昭和49)年のアジア映画28本は異例の多さだった。

「東京ソウル・バンコック 実録麻薬地帯」は、1972(昭和47)年に製作された日本・香港・タイ・韓国の合作映画で、製作された同じ年に香港で初公開された後、翌年の9月に日本で公開された。買春・麻薬・性病の追放キャンペーンを主唱する三悪追放協会を主宰する菅原通済の表体験をベースに東映・タイプリン社(タイ)・韓国映画人協会が製作した。「まむしの兄弟」日本の首領シリーズなどの中島貞夫が監督、日本から主役の千葉真一や適役の松方弘樹、香港から苗可秀(ノラ・ミャオ)、タイからチャイヤ・アウリヤン、韓国から金昌淑(キム・チャンスク)が出演している。日本・香港・タイ・韓国を舞台に、四カ国のトップスターが競演する国際スケールのアクション大作だったが、公開当時はアジア映画という範疇では

なく東映のアクション映画という認識だったのだろう。

そして、この年の年末に正月映画として全国公開されたのが香港出身ですでにアメリカのテレビや映画に多数出演していたブルース・リー主演の「燃えよドラゴン」(1973)だった。「燃えよドラゴン」は香港のゴールデン・ハーベストの傘下でブルース・リーが主宰するコンコルド・プロダクションとアメリカのワーナー・ブラザーズの合作映画だった。日本公開に先立ち同年の7月に香港で、8月にアメリカで公開され大ヒットし、日本の映画界でも評判になっていた。加えて、配給のワーナー・ブラザーズがハリウッドのメジャー映画に劣らない宣伝を仕掛けていた。日本の映画配給各社は、「燃えよドラゴン」の公開前から日本での大ヒットを予見していた、これまでに香港を中心に製作された「燃えよドラゴン」が属するジャンルである空手映画を「燃えよドラゴン」の上映に合わせて公開しようとする目論んだのだろう。そして、空手映画は中国武術のひとつであるカンフー(功夫)を題材にした「燃えよドラゴン」の公開を契機にカンフー映画といわれるようになった。

1974(昭和49)年のアジア映画の上映本数は他の年に比して特出した多

さだったのだが、「燃えよドラゴン」の公開に合わせてこれだけの空手映画を輸入・配給した日本の映画配給会社の商魂たくましい迅速な対応には驚くばかりだ。この年に日本(東京)で公開されたアジアの映画は28作品のうち、空手映画でない作品はわずか1作品だけだった。その作品はインド映画「大樹のうた」(1959)で、インドの名匠監督サタジット・レイのオプー3部作の「大地のうた」(1956)「大河のうた」(1958)に続く作品だった。

「大地のうた」は1956(昭和31)年に第9回カンヌ国際映画祭でヒューマン・ドキュメント賞を受賞したことで使用言語であるベンガル語圏だけでなく欧米でも公開された。日本では製作から10年後の1966(昭和41)年に東京で公開され、日本アート・シアター・ギルド(ATG)の系列で日本の各都市でも上映された。福岡ではATGのチエーン館だった福岡宝塚会館7階の福岡東宝名画座で上映日は不明だが上映されたはずだ。

オプー3部作2作目の「大河のうた」は製作から12年後の1970(昭和45)年に同じATG系列で公開されたのだが、3作目の「大樹のうた」は「大河のうた」が不入りで興行的に失敗し、ATG自体が成績不振で過度期に差し加かっ

ていたこともあって公開は見送られた。結局「大樹のうた」は知られざる日本映画やヨーロッパの名作などを上映していた東京・神保町の岩波ホールで1974(昭和49)年2月12日から5週間というロングランで公開された。1974(昭和49)年に上映されたアジア映画28本のうちの1作品ではあるが、全館上映ではなく座席数220席の単館での公開であった。

余談だが、岩波ホールでは「大樹のうた」の上映をきっかけとして、世界の埋もれた名画を世に紹介するエキブ・ド・シネマ(フランス語で映画の仲間という意味)という上映活動を始めることにした。エキブ・ド・シネマは、日本では上映されることのない第三世界の名作の上映、欧米の映画であっても大手の映画会社に取り上げない名作の上映、映画史上の名作であっても、なんらかの理由で上映されなかったもの、日本映画の名作を世に出す手伝い、という目標のもとに上映プログラムを組んだ。とりわけ中国、韓国、インド、ベトナム、フィリピンといったアジア諸国の映画を選定し上映した。エキブ・ド・シネマの上映作品は、各地の名画鑑賞会などに貸し出された。福岡市でエキブ・ド・シネマの作品が映画館で観られるようになったのは早良区百道のTNC会館3

階にあったミニシアター(シネサロン・パヴェリア)の1996(平成8)年のオープンまで待たねばならなかった。

1974(昭和49)年に日本(東京)の映画館で公開されたアジアの映画でインドの映画「大樹のうた」を除く27作品は、すべて香港あるいは香港と香港との合作で製作された空手映画だった。そのなかで空手映画ブームの火付けとなったブルース・リー主演の「燃えよドラゴン」の過去作品



「ドラゴン危機一発」(1971)と「ドラゴン怒りの鉄拳」(1972)が同じ年に公開された。「燃えよドラゴン」が1974(昭和49)年の正月映画として前年の12月22日から公開されたのに続き、4月に「ドラゴン危機一発」、7月に「ドラゴン怒りの鉄拳」が日本の映画館で全国公開された。

「ドラゴン危機一発」は香港に戻ったブルース・リーが、ショウ・ブラザースから独立したレイモンド・チョウが設立したばかりのゴールデン・ハーベストと契約して主演した2作品のうちの1作目だった。「ドラゴン怒りの鉄拳」は前作の「ドラゴン危機一発」の大ヒットを受け、監督のロー・ウェイが主宰するロー・ウェイ・プロダクションにより製作された。ブルース・リー主演の第2作目だった。「ドラゴン危機一発」から4カ月後の1972年3月に香港で封切られると興行記録を2週間で塗り替えアジア全域で大ヒットし、アジアの国々で空前のヒットとなり、ブルース・リーの人気を不動のものにした。ただし、日本では未公開だったし、ブルース・リーというカンフー映画のスターの名も知られていなかった。

次号へ続く

＝ 図版は「東京ソウル・バンコック実録麻薬地帯」＝